

2012 - the Year in Review

2012 年の総括

2012 年の 1 月に白山義久氏の後を継いで、当実験所の所長として神戸大学より着任しました朝倉彰です。当実験所のますますの発展のために、微力ながら力を尽くしてまいりたいと思っております。この実験所は大正 11 年（1922）の 7 月に京都帝国大学理学部附属瀬戸臨海研究所として開所しておりますので、すでに 90 年におよぶ歴史があり、その間、海洋生物の分類学、生態学を中心とした自然史学の日本のひとつの拠点として、活動をしてまいりました。私もそうした歴史にかんがみ、また新しい分野も導入しつつ、この実験所のより高いレベルでの研究、教育活動を展開していきたいと思っております。

2012 年度は、当実験所の教育拠点の本格的なスタートにあたります。このために新たに 2 名の PD 研究員を雇用し、より充実した臨海実習や共同利用のために、活動を開始いたしました。これによって当実験所を利用してくださる方々のより一層の利便性が達成されるよう活動していきたいと思っております。

2012 年 5 月 30 日、31 日には、当実験所で全国臨海臨湖実験所所長会議がありました。5 月 30 日は、学術交流会「生物多様性学の最前線：臨海臨湖実験所の取り組み」が行われ、またそれに引き続き各実験所からの活動報告、そして今後の活動についての議論がありました。また 31 日には文部科学省からの来賓を交えての意見交換会がなされました。今回の会議を通じて、臨海臨湖実験所のより一層の発展の一助となれば幸いです。

東日本大震災以来、海辺の施設における地震、津波対策につきましては、よりいっそうの整備が求められているところです。特に当実験所は、各種の臨海実習や、白浜水族館にくる来館者など、よそから多くの人々が訪れます。そのために実験所スタッフが避難するだけでなく、訪問者を安全に避難誘導することが求められます。このために、南方熊楠記念館に応援をお願いして、一時避難場所として使わせていただけることになりました。また避難誘導マニュアルを整備し、日本語と英語のバージョンを作成し、訪問者への配布を始めました。さらに 12 月には京都大学の安全リスク課、白浜消防署、白浜町役場のご指導をいただいて、大地



震と大津波が発生したとの想定のもと、南方熊楠記念館への避難誘導を実施いたしました。

当実験所では田辺湾にある無人の島を所有し、教育と研究に活用しております。しかしこのところ無断で立ち入る観光客が多く、島の自然を荒らしております。このために京都大学の法務企画課にお願いして実態を見学していただき、無断立ち入りに関わる法的な問題につきましてご教示をいただきました。これに基づいて、新しい警告の看板の設置などの整備を行いました。また実験所の北側の海岸もこのところ観光客やそれを相手にする業者によって治安が乱れつつあり、この2つについては白浜町にも問題を認識していただくべく、町に陳情書を提出し、町長や観光課と対策について協議してまいりました。こうした問題はなかなか一朝一夕で解決する問題ではありませんが、これからも根気強く取り組んでまいりたいと思っております。

また実験所からの研究、教育に関する情報発信という意味で、ホームページの整備を行っております。これから海洋生物学に興味をもち、この学問分野に進んでくる若い人たちが増えてくれることを願って、進んでいきたいと思っておりますので、皆様からの一層のご指導、ご鞭撻、ご支援を賜れば幸いに存じます。

2013 年 3 月 31 日

朝倉 彰

京都大学瀬戸臨海実験所所長

瀬戸臨海実験所の年報は本号より電子媒体のみとなりました。
また内容の一部はフィールド科学教育研究センター年報に移しました。詳しくは下記をご覧ください。

<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/blog/archives/13495>